
ホワイトクリスマス それは戦争

小石 汐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホワイトクリスマス それは戦争

【NNコード】

N7886Z

【作者名】

小石 汐

【あらすじ】

時は世紀末ではなく、ただの年末。クリスマスですね。これはホワイトクリスマスにおける戦争の話。ちょっと大人しめの女の子、そして好きな子に意地悪したくなるような男の子が繰り広げる、ちよつとしょっぱくて甘いストーリーです。／＼ああ、僕はただしそつぺえだけだった。しょっぺえお……スケジュールが更に詰まつた。

ホワイトクリスマスと言えば、粉雪の降り注ぐ聖なる夜を想像すると思つ。

はらはらと舞い落ちる粉雪を見上げ、吐く息が白くなるほど寂の空の下、静かに相手を待つ。

町の喧騒が身に沁みて、自分一人だけが取り残されたかのような錯覚に陥つた。

本当に相手は来るのだろうか そんな心配が、舞う雪のように服の隙間から滑り込んでくる頃、相手が息を切らせながら走つてくる。

それを見て、私の口元は自然に弛んだ。

……みたいのが、数年前までのクリスマスだった。
いや、まあ、実際にそんな経験したわけじゃないんだけれどね。
妄想ぐらじ自由だと思うんだ。

ツイッターに『ぼっちなうー』って呟いて、他のぼっちと徒党を組み、ボッヂーズと言つイヴと当口と限定の集団を作り上げ、タイムラインを支配する リア充どもは、タイムラインに現れる余裕も無いぐらに忙しいと思つから、実際のところ誰にも迷惑かけてないし良いよね。

毎年、同じように家族とクリスマスを過ごしていただんだけれど、もう五年ほど前になるのだろうか 私が高校を卒業する年のことだつた。母が私にこう言ったのだ。

「……あんた、今年も独り身なんやね」

訝るような母の視線に、私は血を吐いた。精神的な比ゆ表現ではなく、実際に血を吐いた。舌を盛大に噛んだのだ。

母の証言によると、その後、私はだらだらと血を流しながら、虚ろな目をして、そのまま自室に戻つたらしい。

覚えているのは、濡れた枕の冷たさだけだった。

と言つわけで、私はその年の春に家を出た。

仕事を探して、一人暮らしをして、もう誰にも一人ぼっちのクリスマスを邪魔させないために。

これからもボッヂーズの一員として、タイムラインを支配するため！

……しかし、全ては変わってしまった。本当にワケの分からぬ状況になりつつあった。

十一月二十五日、午前零時にセットしておいたアラームがけたたましく鳴り響いた。

それを止めて、私は一瞬で身を起こす。そして、周囲の気配を伺つた。

音はない。零時だ、深夜なのだ、当然だ。

しかし、油断はならない。私はそろりと足音を消しながら、ワンルームに唯一ある窓を開け、ベランダに出た。

空気は洒落にならないほど冷たい。下手をすると心臓マヒで死ねるぐらいには寒い。

そして、今年のクリスマスも雪が降りは始めていた。これは荒れるな　私は雲が立ち込める夜空を見上げて、白い息を吐いた。

身体が冷えるので、私はすぐに部屋に戻つた。

そして、灯りもつけず、静かにクリスマスの準備を始めた。

ホワイトクリスマス　　それは戦争だ。

朝七時、私は仕事場に向かうために、家を出る。
化粧はしていない。万が一に備えてだ。

数年前から、クリスマスに化粧をする女性は少なくなってきた。何故なのか、簡単なことだ、一瞬にして無に帰すからだ。玄関に近寄つて、外の気配を確認する。嬉しそうやら、楽しそうやら、怒つてそうだつたり、また悲しんでそうな色々な叫びが僅かに聞き取れた。

しかし、すぐ近くに人の気配はない。私はそつと部屋を出ようとしました。

刹那、田の前に広がつたのは田だつた。

そして、それを顔でモロに受け止める。息が詰まり、私は被弾したことを探する。あれほど警戒していたのに……！ どうやら敵は息を潜めて、私を待ち受けていたようだ。

私は顔にべつとりとついた生クリームを袖で拭い、まずは酸素を吸い込む。口に入ったクリームは、とても甘かつた。砂糖入れすぎだ。

「はつは、そろそろ学習しましようよ、先輩。ホワイトクリスマス！」

既に生クリームで全身真っ白になつてゐる男が嬉々として、去つていつた。

私は悔しかつた。甘いはずのクリームが少しショッパく感じた。

何でこんなことになつたのだろうか それは恐ろしい発想だつた。

スペインで行われているトマト祭りをご存知だつた。
少し前にテレビで取り上げられて、知つてゐる方も多いと思うのだけれど、若者のテレビ離れが深刻だと、よく分からぬ統計が出回つてゐる今日、何を信頼すれば……いや、それは関係ない。

閑話休題。

本名はラ・トマティーナ。そして別名と言つて、日本ではトマト

祭りとして紹介された、このお祭りは完熟トマトの投げ合いを行う。 実際は色々と順番があつて、トマトの投げ合いが始まるのだけれど、関係ないから省略。

完熟なので、ぶつかつたトマトは潰れて、人はトマト塗れになる。 実際は当たった人が怪我しないように、あらかじめ少し潰してから投げなければならないのだけれど、それも関係ないので略。

そして、町中でトマトの湖が出来るほど、激しい祭りなのだ。

それを日本で行うと、こんな感じになつた。

ホワイトクリスマス 生クリーム合戦だ。

こんなこと、どこの馬鹿が考えたんだとツッコミたくなるけれど、リア充も非リア充も皆、楽しめる合理的なお祭りだと言われ、今年で三回目になる。

祭りが始まった当初、非リア充が徒党を組んで、リア充カッブルを狙うこともあつた。

当然のことだろう 合法的にリア充を爆発、……とまではいかなくとも、直接的に憂さを晴らすことができるのだから。

しかし、とあるカッブルが顔についたクリームを舐めあつているのを見て、非リア充の徒党は、リア充カッブルを狙わなくなつた。 悲壮感が倍増しになつたのだ。

そんな光景を横目に見ながら、私は職場へと向かう。 家で涙とクリームをさつと落として、再び家を出たのだ。

化粧をしなかつた理由は、ここに尽きる。 化粧しても無駄だと言つた意味を、ご理解していただけただろう。

私は、あの馬鹿男の再来を警戒しながら足を進める。 それからは何事もなく、仕事場に着くことができた。

「ホワイトオオオクリスマスマアアアッス！」

仕事場の更衣室に入った途端、男の声がした。 ここは女子更衣室だとか、色々とツッコミたいことはあつたけれど、今はさておく。 咄嗟に振り返りそうになるのを堪えて、その場にしゃがみこんだ。 頭のすぐ上を白い物体が通過していくのが見えた。

「な、に……！？」

男の顔が驚愕に染まる。一度、全身の生クリームを洗い流したのか、目を丸くしているのが分かった。

「そう何度も同じ手を食うかっ！」

鞄に仕込んでおいた生グリーンの袋を取り出しつた。そして強く絞つて噴射した。

よくよく考える。ここ職場。掃除大変。上司怒る。オワタ。

しかし、今はそんなことは関係ない！私の噴射したクリーク

は手で受け止めた。完全にヒットしなかつたことに、私は自然と舌打ちが漏れた。

「ふーん……いいんですか、先輩。僕に武器を与えて？」
「ムゲン心する前より、彼は幼い」。フリー、アヒル、ハサク、年が、

私に迫る。

— やイ—ンケフインガ—！」

本日一戦一敗、今年も完敗しそうだった。

課長——あの
ぶふつ！

一 や い、 弓 が が た 一

仕事の発注で分からぬことがあります。ただけなのに、この始末だ。

私は資料を課長に叩きつけて、そのままトイレへと向かう。このまま自らのデスクには戻れなかつた。生クリームがぼとぼと落ちてゆく中では、資料すらまともに扱えない。と言つか、既にクリーム塗れで、資料の大半がお亡くなりになつていた。

彼らは分かつて いるの だろ うか…… 今日 はク リーム 合戦 が許され る。しかし、 明日 から は、 また 普通 に仕事 をこなさ なけれ ばなら な のだ。 ここで 死んだ 資料 は、 ゾンビ のよ うに 私たち に付き 纏う

そうノルマとなつて。

冷たい水で顔を洗うと、熱くなりつつあつた私の心も少し落ち着いた。できるかぎり資料を、守らないと 仕事を進めるのではなく、今出来上がっている仕事を如何に守り抜くかと考え始めていた、その時だつた。

ばちこん、と私の顔を衝撃が襲い、息が詰まる。油断していた。両肩がぶるぶると震えてくる。男の能天気な声が、私の怒りを助長する。

「先輩、ほんつと、無警戒っすねー」

けらけらと笑う男に背を向けて、私は再びトイレに戻つた。男である彼が、女子トイレに踏み込んでくることはなかつた。

何とか資料を守り抜いた私は終業の時間を迎へ、足早にオフィスを抜ける。

上司ですら、あの調子だつたので、私は掃除せずに帰つた。やつてられん、と一人呴きながら帰つていると、見知らぬ顔にクリームをぶつけられた。

私は無反応で、その場を去つた。泣きたい。

何で私ばっかり つてのは、ただの思い込み。きっと誰もがぶつけられ、そしてぶつけ返し、この日を楽しんでいるのだろう。しかし、私には無理だ。そうやって楽しめる性格だつたら、今頃彼氏の一人ぐらいはいたはずだ、と思う……思いたい。

視界が歪む。涙のせいだ。私はクリームを拭うふりをして、目じりをこすつた。

「……ツ、痛」

目にクリームが入つた。何で私ばっかり……私だけではないことを理解しているのに、その言葉は自然と零れ出た。

「大丈夫つか、先輩？」

声に顔を上げると、朝からずっと私を襲い続けていた彼が立っていた。恐らく、帰り道でも襲うつもりだったのだろう。彼は生クリームを塗りたくつたケーキを手にしていた。去年も、そうだった。

「大丈夫」

そつと彼の横を通り過ぎて、私は帰路を急ぐ。

「なら、遠慮なく」

彼は私の後頭部にケーキを叩き込んだ。私は無視する。逃げるよう自然と早足になつた。

「あれ、先輩、怒らないんすか？」

私は答えない。

「せんぱーい、そんなどから皆、近寄らないんすよー」「あんたは鬱陶しいぐらい近寄つてくるじゃないの」 ただ、それは言葉にならなかつた。

「知つてます？ 先輩、鉄仮面女つて呼ばれてるの」 知つてる。そんなの随分と昔から知つてている。

人前で上手く笑えたり、お世辞言えたりと、人並みの社交性があつたら、今の私みたいになつてないから。

「ねーえ、先輩！」

彼はついに、私の前を遮つた。

いつも通り無表情を向けるも、見たことのない彼の真剣な表情に、私は思わず息を飲んだ。

「怒つてるつすよね？」

「……怒つてない」

「いや、違う。むしろ、怒れよ」

彼は私の両肩を掴んだ。

はつとして、私は彼の顔を見つめる。いつも軽い彼では無かつた。

真剣な眼差しが私を貫く。

私ではなく、むしろ彼の方が怒つていて見えた。

「いつつも、そうつすよね。先輩は自分の感情を押し殺して生きて

ますよね。そんなんで大丈夫なんすか？　いや、大丈夫なワケない
つすよね。現に泣いてるし」

彼の指が、私の目じりについたクリームを涙と一緒に拭つた。指
はざらついていて、力強くて、少し痛かつた。

やがて、彼は目を伏せ、小さく呟く。

「……心配なんすよ。先輩、いつも笑わないし、理不尽なことがあ
つても怒らない。それに昼飯だつて、いつも一人だし、色気無い
ぶふう」

余計なお世話、と私は鞄に残つていたクリームを彼の顔に噴射し
た。

彼はそれを必死に拭い、目を丸くしていた。

「余計なお世話だし」

「だつたら、何で泣いてんすか？」

もはや、私の目から洪水のように流れ落ちる涙は止まらなくなつ
ていた。拭つても拭つても、それは止まらない。まるで、目の前の
彼に鉄仮面を叩き割られたかのようだつた。

「別にいい、分かつてたことだし……お世辞言えないし、笑えない
……人付き合い上手くないことなんて分かつて。私には仕事しか
ない。ただ、ひたすら仕事をこなしていく以外に、認められる術は
ない。これが、嫌われ者の小さな足掻き」

私は割れた鉄仮面を、必死に両手でかき集める。それを被りな
して、彼を見た。

「気遣いはありがたいけど、もう無理して私に構わなくていいから
「無理してねえつす、僕は好きで先輩に構つてますから」
は、と私は思わず声を漏らす。彼は彼で、慌てふためきながら何
か言葉を探しているようだつた。私も何と言えばいいのか分からず、
混乱する。

告白ではないと思う。たぶん、言葉を間違えただけだろう。
やがて、彼は急に真顔になつて、私を見つめる。

「真面目だけど不器用で、いつも気を遣つて、僕らに怒ることも

できず、無表情で文句一つ漏らさずに仕事のフォローをしてくれる、そんな優しすぎる先輩が好きなんす」

そんな、まさかと私は息を飲む。

返す言葉が見つからなかつた。そんな私に、彼は続けて言つ。

「いいんすよ、先輩。気にしなくて、僕にはちゃんと言つてください。もっと、先輩の役に立てるようになりたいですから。いつまでも足を引っ張りたくないですから」

「……そんなこと言つたら、あなたの心が折れるまで、言いつぶしちやうかもよ?」

実際、彼の仕事は酷い。ただ、それは私自身が嫌われることを恐れて、ちゃんとした指導を与えていない結果なのだろう。彼が成長しないのも当然のことなのだ。それら全てを理解して、背負い続けるつもりだった。

しかし、彼は自分の荷物は自分で持つと、私の重荷を一つ奪つていつた。

「構わないっす。たぶん、折れねえっすから。先輩にとつて、僕が特別な存在なんだつて、実感できる瞬間になるんですから」

その瞬間、横合いからクリームが投げつけられた。私も彼も目を丸くして、見つめ合つた。そして、ゆっくりとクリームを拭う。「リア充爆発しろ!」と叫んでゆく集団が去つていつた。私はその後姿を呆然と見送つた。

勘違い そう口を開こうとして、私は止めた。

代わりに、開いた口から舌を伸ばし、彼の頬についたクリームを舐める。

彼は今までにないぐらい目をまん丸にして、私を見つめていた。

砂糖入れすぎだ 私は無表情で呟く。口の中に残るクリームは、とても甘かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7886z/>

ホワイトクリスマス それは戦争

2011年12月25日13時49分発行